国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫
番號 和 204641
冊數 40(37)
函號 167 62

内閣文庫
和書
二〇四六四號
函 六架 四〇冊

和書門
二〇四六四號
函 六架 四〇冊

太平記巻第三十七目録

清氏逆さのり来りしよせの事

新田軍来おちのこる事

宮方の官軍数城を門する事

新帝は別宮遷幸の事

付漢武義帝の例為変

変落を乗り作りたんせいの事

男子誕生一角仙人出賀上人の事

富山入道せいむりんの事 付楊國忠の変

東京帝国大学図書館
一橋家
高田久成獻納之章
浅草文庫

彼沢

太平記巻第三十七

清氏ゆきのり赤松をせめる事

清氏ゆきのり赤松をせめ給ふ清氏ふせうの
御機嫌（ナカミノカミ）なる雲列（イシダフギウブ）アリ（キヤウ）ければ義光（リウシヤ）ふかく
分すてらんかたなかりしかとも赤松（アカマツ）ならびに西国（サイコク）の
陸奥山（ムツヤマ）大勝義兵（リツギヘイ）をあげ給ふ事なれはなをもとより
ちからをそへき兵一人をはいわれ上総（カツサ）川右馬頭（カミヨリユキ）殿を
赤松（アカマツ）律師（リツシ）則祐（ソクユウ）を南朝山名伊豆（ナイヅ）守（カミ）殿（デン）を
てをうつかふ第中（ダイチウ）のかくれなき武士ならはなる
きはまりとなきさく木ふかい仁木右京大夫義長
くうをひてあ阿弥おさんくを清氏をはまり

ふせぐへき兵を多くたもつの物をあつまりさ
ぬかうてをくりて紀和国橋本の陣営に合力
致すしりへと指下され作へ信氏共おを付く東
勢一日か中ふせあ場をうしろ陣幕を西日ハお
ふかのまいりせいに乗ものとそ中者の自上者ふも
と思召けまて座をく橋を石く信氏のロ所いく
者へきと指ら分面きのりをうしを思案をて中
けうい故当年(ウデまさり)正月十六日の合戦ふ打まけて
ひくしハ場ちて城しまりあのうと約款(シヒ)を為百
事ーをそふ文ケおふ乃ひい紙たてトの士卒(ソツナ)被

ヲ(ヲウ)ヲ天城ひくあく為すくうくハ用軍(ヲンイクン)為中ふ足(アシ)
をとくはの事をはいはいふ紙とハた一うん東勢
城場をうんちの者を信氏ハ力をうを毛ハいす
面きのり一人ハ勝をてあさやをるを毛きま
てたくを文款ハおく形へされてせあられうん附
ハ門まハ国ハ宮軍乃ふをけとをうハ毛きり
ちりそくをう城をちて為中ふをうひとくハ
国面国ハ款を約とうをて城をそひ妻深毛
信城ふか城ハ約款を字信物ふりをしよせく
城をを門世を文下を約款ハうをハまん事

さるのかの間かありわとく覺くは但馬衆經光れ
ず五郎をさうしてはあさまたはりのむとも角を
編云かをつひいへとそ上をとをめ
まいりをせて仆絶せうをうう法月法濱工郎の近種
をれしは仆ひしひしさかはの郷俄を仆ゆうを
一和の拉をりた雲井の拉かを拉祢してをはい
を和のゆめ城をのをめとの拉ひをを月法は拉
ずんを一同してはは年より里ハ三年かをさうり也
首分はおかは海中の拉歌ををめ果をして法華城
をは拉をうへをを由義をうて兵をとをめられをう

新拉軍承おちの事

五郎大拉かは二乗寺は乗中綱云たり後は武拉
をは石蔵刑アは新房細川おは拉を法氏金光方を
助和田獨湯濱山ずおんちをめへ河を拉二を余端
めく十二月三日值吉天王をを拉かを拉ををへををれ
む細川兵アが捕氏を濱酩乃拉を年をく兵和八
十余をうめく悦へ濱へ仆く赤和義を京のり実
攝津國兵庫をりが立く亜を山濱へをむへて
あひ月ををすを毛ををく乗中の老職職義をを
國あをれへ拉ををびをくをやり戸ををををれ

東白河の勢ひあつまりし守宰の中一の夜ハ二日
より東方に附れし兇利を付られたるに内か
揃の勢に千余騎と頂せりさて其歎の勢より色も
旗本を抜かかりかりかれに向くふせぐ為し
ともて樹の傍なれともてさし木沿アか猶高秀
を漆の國ハさしトさう南國ハ親文道ふう宮然
の國なま虎幽中の猪をおかりのかりーて又百余騎
悪常高を附にもて歎を目の下にはうけ多り今
川俘く高ま参河遠江のせいを付て七百余騎山
際へさし向らるさりか治ア大𢮦守教実三河三郎

黒田判官を大将へ向らる自余の兵千余騎ぞ
多く揖伏見竹田にひ入させ羽林の兵千余騎をぞ
東方の内にそ勢られけり同七日南方の大ね河
成越る軍評定の内るてかに細川わ勝高すかみ
弊くやされ高く揃ハ家教の勢のふんさいをも
兵の氣象をも遠見すりしきりるなりまてなく武
合戦ふ及ひてきまけて清氏か中自ま佗せられ
以へ清氏は陳にひ入て山際へ打廻りらん不
悪常高小ゆ守の振こ木沿郭か猶綰千騎とりし
者とまも一矢も射すけりけり山際城今川俘く高

かうしめさいはのうをもて一軍をもあつめ海にき出
まして江海中の合戦よりとく大和河内和泉紀
伊國の官軍をはうらうとく小船にて一面小さて城
つきをもくしうて乃陸小やりを日のかをのをを
さき城に六百人ばかりそろへて敵のうちをるけ兵
船をとく後つきて小さき○船をとくしく一足をも
へをすくむた一歩をうしろへ引拔をなく敵
をもうけへをのひへうをすを時石雲列の赤松
孝子帝信氏一をは敵く敵の中城うけ取より義
逢的にとめこうけは拍子をもうはく

しはへをさてたの前者一時の中小宮りはへをさ
をとりされをれをは戦は強色をとて表軍中
船をは強く敵をうてせめのがうけはをは攻
をのいひつをはかもありす思寄をのりく
をは通をは小拔をは敵はは敵の拍子也をひ
二人を南國はく獨小をれは宮ゆく先日の敵
をををくうんををりくさき軍をすんすんと
思ひまうけを通ををはかを寄は宮は拔をのま
まく脇をくやををん矢の一をを射をけは拍あ
くさををを城けををを出海ゆくを一軍

あらんとおもふ爲ふ今門伝ふ者を呼ぶ
とや思ひきん一戦をこゝろみて為朝の秋山へ
引ちりそくもをはそれかしこに陣を張ふる
指た赤旗もをたちはらふ地ちなをのこそし
ゝらけり明くて合戦ちくしからしを東
をおちてこそ東國の勢をまさめとて指
の陣の直上をはけいごしまり同八日の曉に寄
お中の為くめちを逆て物ゑを通をれ武
地方へ落ゆく君ハ母後ハ水ゝ流れうへてい
ゑ又ゑをちの明へすてなりたよく君をうをち

てゑたを又ゑをしくとりゝ去ゝ年代長い
清氏蒙の乃祇ゆとしておゑをふちし給今
年乃をハ清氏恩ふ歌と聞くおゑをしふけ給
ぎてうが去ゑといきめけり貞親政勢の文ふ
をとゝ思ひちれちり同日乃晩京ふ南方代宮寄
勢よおへゝ為軍乃ハ屋形と取きゝ敵思ひれ
かゝ源中ゝて合戦なりをを月門る勢を入
指をたゝ粮をせたゝ赤白河を中ゝゝ以間ゝり
をちの乃なり善ふ伝源判官入乃道参ゑをおち
ゝ時我寄ハへい定めくさもくあり大ゑを入

うちらんすうんとて為帯まとりちらめて六間
の舎而まだ大りんのうつみを為すべかず服
忘らと乞んうつろうんを切りんまり乞一振ま
皆重そろへて書院まだぎしが墨書うんゆの文
集めんさうまん流の花ふとんすのうの井畑と
とりそへてなくす二間の壁伯のうときじ白
者三さかふけるうべ三石入けるの大だけま
酒をうへとんせいしや二人とめをきて雅めく
を山宿而八来らん人ま一うんとすめまくこ
さいをりをきまきり楠一蜀まかへうう音のふ

とんせいしや二人お白めく宝て山鶏屋へ出入ぞ
うんをうむ一うんをすめりせく道養孫門り
をうまてはと久代ちくをおむうひうのるよい
相撲当の為歌の書だ山寄而を定めてらかち
やくをしくいさと紙られ書だ楠山情ゑ感し
てを俳をやめちだ鶴ちあの木一かをそんぜ
を寄爰の為みの一てうをも失りす剥を伯の
酒肴のおのよりを書つこうしめんさうゆそひ
さうの蠟まは石日一振をひく高示二人とあ亜
く道をふとりうをちそ又松をおちありきう

[illegible]ら今安の振乗情源を風情のりと感せわ人
をするりをりまいの古むらちかぞ[illegible]ぬくまく
いくかとすくて橋太刀かく雑ととうまくうちと風
らふやうらを[illegible]かりうり

菊池寛軍勢城攻る事

寛方ゆ今安家の歌城をひかとすれるうとえ
弘のこくてを下の武士ばこかまゆちく付ちく
うひまりくせんすらんと思りまうふ業日れ
遠ーて始めく来る武士こそるうめ作くしし
菊池伊らの上居の旅国阿の大内が軍に飛軍

新田義貞当国方陣の状を聞かの一族を率こ小多
しとりへた或ゆ乃城ゆきられ或いきりひ来叶
られも一人を上洛せ乃漢句伊勢に仁木右京大
夫いと紀が内城へ寄せ来れまけく城へ引籠る
仁木中務が嫡ゆ母後すて仁木三郎ー打まけて
敗へひきゆ山名伊豆ゆ[illegible]く兵の作うま
と屋をめんとて義貞城に引て伯耆へ逃る赤松義
又京の寄い書文刑部拾遺ふいきるへるめ
きくふられ又播磨へ下ゆくやくまは逃これ
幼軍方城とえとりふ者ゆーうくやくゆ来

八せめのかまへとて越前修理大夫入道道勢八千
息男の修理以下三千余騎にて近江の武佐寺へ
よせ来る佐々木治部少輔高秀小原備中守高白
蓋小泉を打通て京へ参らせ加る道より引合
せて二百余騎野洲篠原にて討たれ土岐さこそ
一きハ伊勢の仁木が向ひ城より引ぬけて五百
余騎にてか山を打越て篠原の宿にて追付たり
此外佐々木六角判官入道崇永今川伊予守貞世
吉参河入道が勢都合一万余騎下二月廿四日に
武佐寺を立て同廿六日先陣瑞出につきにけり

丹波路より仁木三郎山陰道の兵七百余騎にて率
しくせめのぼる播磨路より赤松筑前入道世
貞その外律師則祐一千余騎にて兵庫に付く舟
五百余騎を佐渡判官が嫡氏のりに付く舟小のせ
さうひ天王寺へおしよせて南方の追上路より
寄り懸がかをさんきらんと二手に成てそ上里
表の宗賀鎌てしめハ家なみゆくしそとも扇も
るうめとやまつが四方の鬨うんうのあらくせ
と苦ありきれて元祖よまく志しのせうつ下を
一時ようちすてゐき小わくすさ南方へ引くとて

西國へ大将をうちたてくり一統の伝法山名仁
木義深し合く又こと和を結とくさあとも同廿六
日の晩京都より南方の夫婦あ字治城を捨て天王寺へ
去へ坂ちきれく同廿九日将軍家へ入給ふ

将軍足利帝に別うり置奉の事

帝和の直上いまさを和の武徳寺小田屋にて
京都のうちひいくらんとはんくうち去く四石
きう寄る廉者元年十二月廿七日小寺和中将爰
もやるを立て洛中の西流小夏加なく遠流しは
れ奉き置奉なうへき由をとりされあり付奉君

をとめまいらせて彼年の月は宮方ねひかく
ちうまの和うを晩あ人る事ふの事なうを置
和屋なく詩書をりのかくされてを法叡山の東坂
へ行幸成くをもて法華寺ありさく波よなう
三賀の浦あきて久ちさ法なきと蓋なうの苑
園小今年を長とくちうかなり色を和と月四ひ
なりうるきれ嶽林の猶うきか法は皆今一月を
と置奉をすありされをれ去年十二月八日
和法和ちうを法ひし剃まうてとか法寺月
願あうし里内裏うさをもうしを原ふ者先う

を命じみたなうりをれて寺うく仕候理状加て
しも還幸ゆうめとて豊年の表代書状ゆ公家迄
被仰付ゆそは座ありきをの日ゆうの変も
公家ハ仕ちらひとして去かるひとくきれて
内裏修理ハ変象ハ仕られうけ遣を仕候ゆ
下されなくらいハ乃行面下ハ見こ仕りきを仕
いハ遣うかの乃仕ゆ面白をを面さして三月十
三日ゆ西園寺の旧宅ハ還幸ゆう先ハ地蔵寺
ハ御先宣院幸ハ地なきを仕ろう申くおをちりを
めて家屋ゆ雲をひえうり冊書状面せう御書雲

ゆり状のへうう法ゆ院幸ハゆ法あきをそく見
しゆをゆうゆ成ゆ幸ゆ面をうゆ見下ゆ松風
いくをうぐせう門おゆ柳ゆ柳ゆ生う同ゆ七松
居士ゆうろうを明くやと見て掛さびうり
会ゆく今年ハ長状遣ら仕ゆ仕ゆ法ゆ乾角ゆく法家
ハ修理ゆこく家ゆ幸ゆ月十九日ゆ
里内裏ハ還幸ゆう修幸乃月ハ雲ハうう
行幸なうちう仕ゆこのけいこ仕兵の武士ゆ
法あうりを明やうてそ見こうり幸ゆ御門ゆ
接当清氏ゆ幸ゆ年家ゆ乃概変うて兵のうぐひ

付うつりゆくを義といふ敵味方を分て
弓矢をねらふ武士の勇士なりと雖も
文武八徳兼しねる支倫小帝流のごとくなるべ
きにうつりかうしくいふ武流より
ゆ定るべしと吉野の立上をもつてあまりうせ
て孫四郎うろひ四郎吉げ義利大将れ何とぞ
さげられをくを相業小朝義ちく出年の冬南
方宮軍おたる寄おせ中わ面城をひ拾てちも
らく海中ま拾をみるひし付を出人ま也付物
をもいく祖ちく宮軍ま人物をはくされて活

民河内国小石ゑれたを四郎拾ひて勢多の
人をもれ也ちくひはまを人られしをきう
乃四郎軍ま人なる市活氏かぜん市ちさ小ち
四国へ渡さ付日来おちうひし兵たのを世付
ゆをやあうんとて四月十四日ま小松七十艘
小ちの新ちく海渡国へ渡られをう
大将ま人ゆ事付漢義帝流ゆ当ゆ人
を走大将を出ちうあり大将を人ま面ちさ
義ちうひ小ちの変を拾ちう天下騒小ちゆ
ちて将文をりて世流おさひの何か知遠流之

ちゝ仁義を守と正ら政1今迄歌なりし人をを
そなふうちく政道をなこうなりせ文書をさんつく
百事ありいをゆうぎてうハ聖の表代同じ也
ちゝも唐の太宗も武用の法を仲ちをうう
てうちんうちうちた親の概ハ武貴すゝきき
てハ赤ちゝまうちのちゝ武をてせをちゝ
ちらまた切あらへを貴しちゝあうへを罰ちん
国あらひ威勢あうちのをきを後へをりて大将
ちゝせたちゝ人ち秦ハ左将軍ちやうん右ち
方陽ハ兵を率ちて聖1後海赤ちゝうしちた項羽

も武をて大将ハ中をあゝへす項羽いうう門の
舎1ハと入てる組とうちけうちも漢1下
て後も法律ハ国をさけけぶか板の先駆武前方
ちうう法ハ推う春和法をちうをを会九兵
陽ちゝハ乃道源ハ大将の号武さんけく先代影
武ハとうゝせんちゝ法ひしちた叫りたをを右
兵陽ハ亜を大将ハ号武ゆうされてをの将軍
をうゝせんちゝ法ひしをうをりすをハ仁赤右赤
大事義をを大将武さけて世をちハ切人さん
させちゝをしをうれちす今をハ神川右将当清氏を

大はくとなく代〻自然宰相中将なりつねさん
と申ふを叶て寄兵を催しあつまる大はく
なく成ぬ文先乃乃をとゝ人或ハ自法の義をそむ
く故に天乃せめありしかやうまつ古を世
とゝゝむとをゝ人ハ当大はくをゝひけるまや
置秦乃始皇の世成うゝりんとて陳勝と云きゝ
をの自大はく乃中を掌て大河より南わしの新
なく秦乃大はく軍白起がうめようまれをなこ
うう墨うとりふ去自大はくの中城掌て楚国より
おうりをんをゝんの大はく軍ゝあうんはうれ

よりあふ項羽高祖ふ会とうひてさてい雅
をゝ大はくとして秦をせむをとゝりきゝ
をんゝうゝて年七十三ゝるりきゝ老法盛中ふ
をゝ見年くゝけゝを天地乃間ゝ長ををを理
ふゝすゝりふゝすゝりふゝすゝをを三戸ゝ
国なれを秦成りゝがさんをゝ人ゝ為楚王の子
孫ふゝ人しを為ハ秦乃始皇六国を掌りて
て下城并吞ゝ財産乃憐ゝ法ふんをそむ
く事ゝ始皇帝為なくを見をゝくを地を
うゝつりを屍ゝをんふゝそ長ゝ楚ゝ御ゝ

故ふしんをうしなひしかのゆゑをもて捨れ
たる人のうつ子孫を一人立て法華経命ゝ
ふへしとぞ計ひける項羽高祖をかばい微
ぎふ申し出りきをまたいかをかのうちその人王
の子孫ありと雖をもめ名ゝ人王の孫ふ孫
んとゝをゝ人久く民間に隠てひにじを取
るひきゝ秦帝ゝうし業をうう
を高祖をひゝを命をはきをゝびをゝをな
ゝり漢地の軍い利をしゝんれ兵ふこゆくゝう
ゝけゝゝじゝんの世はゆゝはゝびふゝりあき

秦をて四ふふ新田義貞義助兄弟い兄帝れこ
ゝりのはゝをく武功をかゝはゝをゝを子息
二人義宗義治ゝて越ゝ国ふありはふ武勇れ
乃文ゝをくらゝ光朝ふ世ふゝゝはふ人ゝとを
て勢熱ふ志せれゝめ武ふ勇相せゝれを推
うを家をうゝくし推う同切秦はゝばるんふふ
秦ゝをゝく唯赤不義の人をて大ねゝせゝ
義貞吉野の直上をふ秦めゝゝ事ふゝ一を
をへゝすゝひ一旦軍ふ打ゝ世ふ変あり
大世ハ又人のゝのゝそ光ゝゝ

尾張国葉栗郡作とんせいの乃ゆ
物ゝ川田川お拵当歳ふるゆ
ゝすりしない物変とりふ
去ゆく志て毎年うゆいさうゆ
ふ垂毎ゝと評定ありをんな
作ゝ来作渡判賣入乃道ゆ
りゝへ乃人ゝ活ゆいせうゆ
入乃乃子息乃葉乃作毎ゆ
ゆけ葉寧ゆ中ゆ毎ゆ
寧ゆ織を用ゆ氏人ゆ
道ゆ元来商賣ゆ三男治ゆ

ゆゝ先祖乃先二人を世ゆ
さりをれを乃葉乃作物ゆ
ゆく物ゆ乃物をゆけゝ種
ゆくを黙用ゆ
ゆされをう中ゆ
ゆられをゆ小付
ら代商賣ゆ三男を面ゆ
大夫入道ふ世物成物ゆ
屋乃作毎世成竹代文ゆ
ゆ男ゆをん乃ゆふゆ

ゆゝせゝくゝうんを思い
ゆ織ゆをゆ毎ゆ
ゆ物ゆ成ゆ氏ゆ
ゆ毎ゆ
ゆ毎ゆ
ゆきへゆて
ゆゝうゝさ
ゆ祖ゆ文れ
ゆをゆ
ゆうゝんをゆ
ゆゝ

面をひかへ居りけるが、ふと命婦が二百七十人同
じ様に泣きうろたえ、思ひ〻〻に思ひ〻〻の仕人
数に成り、文の面あるを見て、我が方に残りたる者
てお家とんせいしぬるうち、新参の者共も
但し此内の人のあり様は、那白いとゝとり切く成
ふ者ぞふんゆうをそなへ、い頭を作り見てむうん
むぎこふ子まふ夏のこと物かけ者共とんせい
をえ行末と成らん事ゆくやうんすらんと
思ひ〻〻ふ作るふたんさむう事〻なく三くこそて
泣ひきうこそ成りうさきれ

方子愛宕一角仙人志賀ち上人の事
元祐堀の相元成きりめいしやのきけるをきみ
ゆ事〻ち上古ゆを求代ゆそうく宵うう紀変
こそ成りうや蓋天竺ゆ子くアけの仏弟子
色去ハ蓋のゆ事うよ仏果成せうせんうあふ
六ちうこゆを成しきうゆ月ん〻くうう一人の
ちうちん事て賊変をうふ〻金の内に賊方の上
ハ衣成うふ〻く元をあ〻うふ須ようきんそく及ひ
居室をうふ〻ようあ〻ハ内に成ふかハ毛をうふふ
毒鑑をおうすねさくかくこそきりちうん程

あまを小あきうりと申同い海が船をくり出てまた
よあ之へよりそひきうの方子女船をくうりて
まうりくの方と聞くあんやは面まふしらくな
らん事いくうへきとうの方をうりかるくは
紙のひるくくあらんあり之をいくとして自二船を
指てうりんこぞあさへきうりう門二のまる
こをまよれく関船いあくまてなきさる紀伊也
うり我国の用ひうの門へきとて別地ふるけて
ふをみ一まくぞ指うりの紙勝こ方子人のみ
新の用ひはまるこふるあり指すも元預用ふも
るき船とうひて浜白地ふるけつの美紙金金
さうく一会ちんいのんをなこちくうり善悦紙
紙屋しうちきうを切と猿ありし六ちうの
の紙一対小中ふまて彼戒の聖守とぞ感ふけう
又蓋天竺のちうるいらくは一人紙他人何りふ
後と云きん対麻のつうみきるを見てりんよく
のんをけまた光くすうて之ろうせいふうりきう
を加くまるまの美紙麻ふひて子紙生を取い
人ふくひこいは一の角ありきんを見る人を
を一角他人をけう紙紙切作して神通球ま

あり、あるり或は山路より降り松の木陰に暫く休
居たるあり、うなりをかよはせ他人若へ下るとて
をへ、まく地まで、ふ紙をけり他人をうて或立く窮
まるあまりしを面をもふ、せ面がわまりしを
見まもるへ、まく小紙をうり出し窮迫を
ゝへて禁窮せんゆりと思ひ八幡に間
まあゝゆう所の大窮小窮をとゝ八を窮の中
ふをとゝ窮けうもより四山より面をふらすへき
窮祈るけまを表三月より夜の来まを知らをて下
大ふうんゝちあく山田のさうへさうゝ

ゝゝてをまくうをまをりを表遍まを民のうまへを
やうをていふふくうに一角他人に通力或うひ
て窮祈或居の中よりおをへきゝひ祭ふふ或
知ひをうを他人ゝひ窮をくひ氣をのを
てを生居老の道をはうを十二の親まをひく
来ゝうの所あまをしを乃まへまくいうる
人ハあり乃ゝめ人来こをくを死魔のゝくなら
をハ多まゝけを者まをそひ見会をとうをんや
盗を三ゝの文女の中まをうをゝ祭まををを
あゝんを一人は来居の中へ乃ゝハをれゝされ

祝をすゝめ書の中にわを出たるとて祝をそらら
うとうの義は勢りをむをたてまむるやうな通力
をうしなりていへきとをもしかきの法性法性は
用きれを刑三ゑ兎一の石ぜんあるとやけの
小ゑ百人の義人城を入て一角仙人の事為に用
へを送られきく石いさしをいそしきゑれ壺城
おてをくゑ小ゆるけるうゑうゑんこ立入給へ
ごうけをるこれく紬の家うく間を初きれ源
るきを紬なれを譯をうゑ云るくして十待れ
をうこをもきを思ひをうの法のの法のきれきゑ

ゑとを城ゑをを勢り給ゑ仙人を思ゑ小あうざ
まをあやをくを石ゑ男ひこをてをくの義をくゑ
をく家行あるをゑ祝とを法ゑ仙道を
ろうんの義をゑめてをりんをくををゑきを
む仙の法はつきををゑ城仙人
を一ゑ石ゑをれけうゑりをいをんをんを
ゑよきを通力をゑく食嘗神をゑの関ゑなり
ゑを仙人思ゑ為表をやうくひるをく城ゑ
をの主ゑ石ゑ中へ立場り給神ゑ天ゑ光を
風面祝小をゑひをを農民ゑ仙城ゑとをり

を一角仙人を仏の因位なりをいんしゅくみよハ
やまんうりみよを也又我釈迦牟尼仏上人
とても学勤修の重業ゆゑ遠ふ仏を崇れ
大宅を卑く永くれ和の志やうせんよ思せんと報
ゆうを筆を乃人をとをてを義中の恨を志ひ
ようをうくの物をうよ合てを面よひのおよ恩
おとをうを也ひ雲をとるをよりの志を代高をて計
さをひ祖よを仏りうを人し義代松る状風言く
風ふをり或時上人茅窟の内を立おてをを一番
乃仏えをさう人中の西よハ字の和をとを仏を物水

乃波を仏りうをうふ乃くをあ和親仏撰くん仏浦し
兵一人立給ひ乃うを商よを東物のみ屋を所を所の
花園乃義の気多浦仏遊を仏を仏海ありをくんが仏
車乃和をとをあけられ乃をあうは仏上人仏目仏見合
まりをを也て見をくをを人面をのひてをう海ありをを
ふをり遠よ仏車乃仏を見を立をを仏我思ひ
をを乃方をなをうを乃を月栄の高よをう海く
中高よ乃ひ高りをを也親会の家代上を代をのう
をう八面をけのを立をひて梅名の聖代中よハ
をう人乃ひをう本恩の志をををを也けのをて

すくさむやと嘗山内室をあらむ遣をいとくんを
うさ四ようひらんをうのはようそふけて忌きわ
田殺ふかく今生れまう新ん作ぬふをるれすを
殺生のさりをうきうわへきれて我田れみうさ
文をうやすれは一猪卑しんを尊く陰殺をを世
をやと思ひを上人こをうふをもの作えをつき
すくく来殺のみやをてれの作れハ来くまりれ
つがのうりのかふ一日一来ぞ立うきう余の
人をうかりるる殺行をうを門ちさの人やらんと
あやひうもなうりあんかみやをれえれ

四より遠よ雷鬼せうきてをいうを魚志賀代范
足八海さふ国武足合あんりく電ちやたを寿
らんをを加よ面ふりく殺世の麗雅う分のよよ
うと魚ふをきよそすくく寿計のあれしよ情
武けをすくさむんをしをあきと四名てよ人
色へとめられけきをるくとみうひて中門
のみをのおよひをまつきてりおうく変えすく
さあくとをる紀殺ひをくみ盗を所与偽ふう
れ義文の殺あくきあををこををうちくも四名来
けきを書のしくるうの作をえの四まうか

さ[illegible]おけを結ひ角ゝよ上人は[illegible]とり付く
[illegible]長ゝ[illegible]縣のそ[illegible]ふれ[illegible]面をくき
面ふとうゝよゆらく[illegible]面のを
とよまれけ[illegible]やゝくゝ[illegible]やすゝとりあ人す
おくらくゝ面のうそ[illegible]のゝちすゝを
まれ成りさ[illegible]人ゆらく[illegible]面ゝを
とあそゝされて重ゝんと[illegible]ゝくさゝめ結ひ[illegible]ゝ
かゝゝ[illegible]ゝんこの重人[illegible]ゝ[illegible]
ゆをとげゝゝ[illegible]ゝ[illegible]のゝ[illegible]ゝ家[illegible]人
のうき世めさゝるをは[illegible]ゝくゝんとゝれ

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ
ゝそありうゝきれ

圖山入乃道せいむりんの変付揚國忠ゝ
圖山入乃道せい金[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]三人ゝ[illegible]ゝ百余[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
三戸倉[illegible]ゝ[illegible]ゝ三の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ[illegible]三百余[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

付てとうちゃうと引おし急ぎ軍をすゝめとそひ
めきまつの島山のほのかなるのかの城
やくあらまほしうえりのかの城やと思ひけれ
文百余騎と三手に引てうち三月廿七日に敵寄こ
侍豆の府へうちのせすぞ寄あり きうしゅう寺山を
平一きの出たる島山と成合て敵討ようせうと
さうぎ平一きいらど山と成合てうさけ山に立
城うちうんとすうきの也とくんぜてたよんとき
合をまたえの一をもうくしくしく討おさすぎ
三万騎ほか編会城さうくひきうりぞく男女の

あざけり嘲るの方馬にやをうちうちに男ひきまた
新国国中と大切とうてやうく武蔵和泉侍豆騎
河上野下野上総下総八ケ国の勢廿万余騎とも
はげられきの島山を廿余年たる以といりく
ひに二方やう門宗にあまりのうちうちに敵
寄一の城に居ーてたたをうるあうちうよあざけり
うち東八ケ国の方たの命ふかりもらんとひ用ひ
を付きうを我なの仁酒とくんぜんとうくたる我
ちうをあげうちんふ騎ほ騎をせ加ちう
相ものあうちうと敷しふ東よれ逃ちくよその

指一騎を馳せ寄せ候為一方の大将の内を切り崩し
野外を降参しれ又をかれ候ふさいれ家人うり
切れ他ふあとをの市陸を見日ふを人おちうせ
今ハうのふ為ハ見ハ見くさうきれを大勝の者く
ひふ他をやく二の城ふ火ハ成うけて陸孫右ハ城
へ引こもり養をうれ那自ハ酒をもうしし大
勝うの九せうの雲ふ月がごとく今日ハてう
ようしきうよの三せうのあとをひうまく
すうを我方ハうをとをしたらハ新田九郎義俊
をまけてうへうきのとく後悔せうと

いうう弓くひくひきうをうきうきうしを
をうかうれ松島山入をを去こ奉来國の勝をを
ハ三くを南方へ敵向ふうしうれ金ををけ
を兵庫の揚四郎義孫山が天蔵をうてなを世
をうをもんをうれを御方ハ書庫ハ玄宗佐
ふつを拾ひ拾ふハ五幸をうしうを来ふか
をうおうをけをしまを為ふ成ふをあを
をうを文をのを法ハ左ハ文雲ハ車ふめをれ
左右ハ信明人ふを上ひうを成幸しを後文
三十六文殊まうり三ふ人の名を法師をうを玄

敏宣右武両把二人子ま
りかり知りかりうく代
極く長の老状のはり月
さりしか文あり者也孫
さしぬりうさ世の様子
すくなよ世りら毒ま
きて出祢を知らやうく
りう里てのを月をあり
表の世人とをすくさめ
と知りね話をすくぞ弱
きんえんのひとあよやう
毛ものを毋ひ命称ちく
よ投まりあまりか嘉ひ
よ原りちり代文人間の
代天人の紀ちく代出祢
といさい元亦天の命せ
ホーをけいちんきんの
せん漢の娶文人とう月
と代ぬ小毫の毛をよ
ふさんの祢女をふせ

きうひとりふ義人あり
毛ものを毋ひ命称ちく
よ投まりあまりか嘉ひ
よ原りちり代文人間の
代天人の紀ちく代出祢
といさい元亦天の命せ
ホーをけいちんきんの
せん漢の娶文人とう月
と代ぬ小毫の毛をよ
ふさんの祢女をふせ

世代自云の方よりやうやうさき変とてちうをんを後白
とやうくを国のひれ色いろうんやを名をうん人と
やが板小月りうく見し新名を書し附の王権考
人云は大まさいしやく城もめうんきいとあ
ぢくうくを支板うもん変城色重ちうた文毋うりて
ゆうさす板ふく志んをうこ河りちうこのようく
うく桃花の暁の霧を小くうてうさちりあまる
一枝の雪ふかをうかうしくく也或人色をあう
うちうて云京宣帝のまんしの文福いもうれば
あへまりうせ々うと云京天威まりとまくうさ

ひとよ高祖軍と相ぢうりてあうりうどひおく
相文へそうぢきへ家をく云京の叡感称いを
の四四ひ花うく相の一方ちかて方めあまれ
御うりさ書日の雪うおあ五月芸陸文まへあ
とそしく猫人を色をとい世りしの常代宣物樹
おまて頭相ふのが書一御の清番人代んを感
せーひ民座せうさうつうう感揚物うりて文花
かいまむ五の単象前ふ芸風去うへ
てぶふうへて絵ううちうくれふうん
ふいをのぢりうんうを安せちう兵歌芸園代

花のかげかしやし夫人のよそやひをすてて去
よ和せうよあくすうす一おく意志を面を面ゐんく
しより紬の中のさんこのおもきの上れふようれ
花と見る目もあやはほんに面よひきけきく
をそをとをるれ給りて畫ハ給日よてらる面を
をふふく面内の花ふ意ひとすあ秋そよるを
四り厳秋同ちく面夫ハ目よ嘉をす給ふ玄宗
あまりハりるさふ世人の面よこうゐんを数
しかふらき秋ひふちを振るうせんをんよ
てまハむしよあるす同ハやうをひのりを

ふうちぐく秋見をやと思ひて躑山夫のあん
せんよりハの御をちき玉のりうみをるの
らうめてをひの世衣秋ねき給るうさちを
覚をうよ白くなるうほちさへよらんうれ
世湯をひう物をまた藍面日あるくかふちく玉
ハ海をあううきい雪とるりて梅花ををくう
とあやまるる程也牛車ハ直角をうりて
夫中をおへせうをらうさハけふいよう同
戸よみらく狩用いを六ゐ伝よひをく箇考
甚夫子五作ハをくりて春ひけせけた

と揚州出といふ者あり元原敵にて敵人の
中よりひとりとなりあるを出さうく藝をうく文武を
あらそふ武ふもあらそふ者ありあるいは先なりあるは
屋うく大だいそなりされ者の武術よりあるは山と云
者の同じ種類しやくあるく此ふ揚州出よりあられ
くやをくりしに出ひきれ者すなわちあるけ者力
及ずすりあるふ者ふ天子を出ちくの城ちとは
人を位よのもりて州の城ちうさうをみ
てとうんの州こは王命城をむくとやくちうに
うきなるふ城をふの色きい激せうきをうるやう

ちくちうに敵と戦ふ城ふ中をさんの者
けられたをかくうやもくをちりむをさせを
のそをやきうの用元ふ上ねの軍の藝角とそたされ
きの揚州出刑天寸方勝の揚城幸ちく大蕎麦ふ
陳城ちうそを大ねさるう人八土幸のんぐうを
一ふせんうあふ士未食せうはせうふねうんせ民士
野ふ者をれしねういをうす一度ふ敗をねく
士とたふくらふ一樽の酒をそくうて兵とたる
のむこーそやふ揚州出ねまた角酒をひうを
て兵の飢うをちうんを者また義女ふまうりを

て人の所をもうず人兵衛門の衆上のこと
四軍の至とて思ひ[illegible]
はきと[illegible]小兵つゝ進ねをこうりくとて[illegible]
うりまれたとうんの我狭[illegible]
ばかりせかとを寄あり[illegible]
土幸のんを一上せうまた[illegible]
國忠が天下[illegible]
西ぬけうりまれを大[illegible]
上あるひるびきよりの歌
うた揚國忠寄小を尚[illegible]

て引けうが今なを大ねをとゝ結く敵の[illegible]
きうく一軍のすく後らんを上ゆきをりあり
きまた四方の諸の中よるゆをのうす相をを世
て[illegible]兵城一万人首をもらて寄[illegible]
かつねさ毛はとなんの[illegible]の首りく号あく
敵八を後あり[illegible]して首をもられ[illegible]兵
[illegible]親子兄弟りくを万[illegible]を城かくうて[illegible]
のこ敵こようくすとゝ[illegible]揚國忠ゝをきうん
をうるゆとはをれて[illegible]人るけきをはあの
兵一万人い歌の首とをしくうりんの本よ鉄

られ大蕃乃地を星い打平げうて所と号ちく揚
國出るぞとこるりまきをうよ
くりふ事一方蕃世こそ
ぐうんとうすとそそもうを安徽山ぶ法大
蕃ノ悦ふとうん城ゆせうんんて居うりけのが
財ぶりめとよろしひく法推よ約をうー土事こ
礼を添ちてやうくちうと討へてく蕃角を活
うりと投降して兵城りのすすよ大蕃ゆく揚國
出ようれうし一万人兵の親敬先ぶ大こ
ようひて我をとをせあ用りをう祖ゆ安徽

山ゆ兵い祖すく七十万勝ゆなりゆ小をりゆ刈しい
きんゆう城衣拍軍をこ子四ゆを危拍車ちく
敬へのぐうよ酷次ノ民屋をるやまきす徽郷
ををせめとあ徽山ゆ敬よ敬く出安へせめ上ゆ
とを蕃ゆを人四ひうすうん為うくこ為うを
拍て士卒のつきとそりくりるゆ路既よ
敬ゆり七十里を後ゆうりとうんとりこ山ゆ
ゆりて拍て敬へをを拍ゆうーゆの聲をそあげ
ゆりきる玄宗皇帝ゆ打黄瓜羅山文ゆ約棄敬く揚
を把こけいこゆうゆの棄ををいて大蕃ちく

の糸をもゆひ直しと思ひ給ふ者ども
ありあはせたる者ども手く立ちやうはりそう紙
ばくるまいこりうちひしらくふかけうり
ようしおくとも物くあ縁山の流をいきんゆう
子世的ふ百万騎ようせうとさらぐさ者共
まへの祈をして乗れとてかちよりうんふ世西騎
をおそへてうん奉りの面々さ一向らが兵縁山
流かとりかんの山はおあがりてかちよりうんふ
はなりもせ物ひうまに乗りかさより西ちりよ強
騎うれしと雲霞十万騎ふ知かまて死ようか

ちよりうんふ月ふかうきれて一日教長ふかさう
てゐるうちをうの使をちせていくおうのふ使勝
事を知ちうう悪き詩書とめぐらされて蜀山
へ落ちせ給ふへき世とりきれとさ元面
白りつつけいこやうりの乗を赤をちちさう
ふ玄宗皇帝とやうきひと同六宮の車まめされ
て教とおち給へし揚幽思伝指として法王ふ官
宝ちちちうりの極めくうくく六軍と
辺よおちとりへかちよりんを為ふ軍ふえちう
まけてりう者うきんへ落きれて安縁山が共元

を遣はされまいらせくさのなかを所詮は迫
つゝまれまうまうの所よりこれのはくみを通
はを給はりの時他事仕る官軍六万余騎乃と聞て
云城通しまいらせ候いかゝ事そこは弱あり
事まれ共落ちて城あはせ地よりひざまつきて此乳
城ふ如集て天子を囲をさらせ給ふ事ひとよ
揚州出がおろりと拵め飛るさ人城切うりし故
也然て揚州出を官軍の中へ給て首をとる天下
の人のかをやをめいあ事ひ南部
山うきんさ兄弟是を天子のまうのを通

まいらせ申すとそ戸きうの迫強ふか
拵ひを叫へうすと四石をたらやく揚州出
ふ死罷をとふ色とそ拵られきう官軍大一番
て揚州出城るうり引取らせ弟の先ふうつゝ
ねき一同ふとうとそまうひ南ふ山を拵強し
きうやうきひろはんの中をかるはき角て
を官軍拵あきうさうを義久をて旁書を通しま
いらせさうきれをひとの上のいきと風り何変そと
為らるゝ兵法石把乃酒たうをは海北方
まう拵をへうすりし関の世をかんをうせいし

異国渡りしてあけし夏をぞくらうしとおもふ
うすぎぬのぞ思ふらばけんもやくやうきひか
ぬと語らすなたゝ小忠言のいとあふひの紙を紙て
蓋天よ血をそそくゑしてもやまを玄宗皇を
やなてのがるまうきを相と思ひ出られし牧角は
云ふを及ぶすれひの紙をしかさりてはんさくて
ゆうまんの中にふ紙をふけを語ふ義の神を
如かへをあらき風よりたちる紙はかくるあを
ゆうかへさよ屋うきひさてをやのがるゝと若
乃は衣のトへ出方をそそのてかくまさせ語へ

を天子自ら行かをひの小かさよせて先勝を先
て指う走はあるせくるはけう指はけまさをも
いうきう武士たを活武を指く地小紙るを中
小邦見数邀うう忘ひすのうきくがかくてる叶
つうすうて出神よ和たうせ語ひうやうきひ
つはを引うるちくるがえのトへ引ふうを
屋うくるつひつめ小ぞうけうきう玉のうん
うを池よみれて行人るを色やうを書はうさ
へうよまれて見うへ神とかうの云
小力すくうくはかかをけうせ語ふす

ケ三月まで攻ひ来る共金いかなる共出る様
をまのあたりに見せぬ様にしこそ中くたくれ共
つとめ来る様にと隙よりは三隊の兵隊
矢弾てあ所へ打きりうをやめきれを頼すく置
へ落ちうせ落ひきり引ケ三月十四日の夜を
幸にそこうせ来る敵共かこうよりうんと四くに兵を
りかし来くて大事万端置の物出へそ来りきう
新撰山ゑ物を始め揚屋出ぶをうんとこうゆを
やくしをまれもくくとうせあ用りーーう今れ
くくを共てを下ぜうをもうんとすうきの也きり

とて兵共かく落うせきくを召新撰山ゑ衆死三兵
長一時の暮とそ見えくうりきうか様ま物は歌か
日くまきんし置の宮寺ハ四こうり来りきとうを
玄京宣帝をやうをひの事ゑ四三月ま也落く
方様の改めをは公儀熱うれすを死ふくを生き
めふくいきて命を何うぎんと四方かハ他
逆をすー敵共かこうんくうをうゑ角てを叶
ーと四きれて玄京宣帝の男二の位子ーーく
きうのうをやうきんくいふゑ明くきくはも
しきをを天子とあ様きそ江海ま遠角を下し

法皇の兵成りしかども八十万騎なる勢八十万騎なる勢なりけり鳥羽殿に
籠りけり鳥羽殿はいきんゆうの田の城大なる
てきもの八十万騎なる勢なりしかども
見て赤面くうしばらく敵をへうの神盧百万騎
の兵を紀し黄なるうちに城さいてかちよりんが
勝に加ちうちいきんゆうと戦きく用安鳥羽が
兵たかやの遣ちく一対ふ落ひびこうり鈴談
忠ふ諫せうきて洛陽刑ちつまりきれもちもく
そう位を譲ちく又玄京城位ふつけきんゆうなる
皮軍皆置へ位遣ちど系けうきんそううくてを下

の指ちく三月ちうりゆうこは付て元兵屋うちひの
世ちはちせめ事のこ田石て二ちび天子れ位
城ふませ法りん事もはか言ちう孫たちう兵
の首の位をも宣免せちやく田石すはんふりを
かきて屋ちく屋事の義刑とりのかされきんを
ちいうちの意ふやうきん城ちどあられて気ぞ
去年の秋やうちひのちのふちうされてちう
ちくうりし位よってはを去伝の柳は風
ちちみ色ちる枕ちうを見し孫みられうちの動れ
面新は激ち浮むちうの美は嘉ちちふきちう

も落て地小乱きん出れ
ちらきくいろ出ら成る
ふを高井の沼也
目られ新田れた書ふて田
た撰花ようくさして
分きわる夏ま出海
成る色りたさ也ふ
山きし撰色ゑ言こ
年日を色くあこ遠
し垣ひしまん乃花

絵ところうこい池花同ふるあきのふ
ようひようの柳ふようあ面いしく柳きま面
乃こ花主墨ま射
風桃雪花乃用ら日秋窮ふとう菜の為る時面
文菊園秋菓勢り文菜階ふみらて紅ら
行文ま目をてんの文成いしまひ新面ま給
成やくらりく成月撰夕面小色花て田せう
せんうことうげ遊ふく赤新りをなさ
遊こうせうこ初て云き新りくうま置河
あけるんとぶう天ゑんま日うらまい新花き

ひとりいのちをまぬがれたるものの
しらふうへねはるものをのこすくなりけるを
とハは海のあんさとを叡慮にまかせられすは位
をさうへしめくをう宣帝より懐奇り玄宗を長りり
さうくは海よりあかまく仙洞はしはなをすもはをう
をうのあふはんこうのあとやうはをうゆう玄宗は
文王条てはいハ神仙のあとを治をう遥に君主をん
くのは四ひとをれはやうをひのはをしるは
を為て海条らんとををれて玄宗かをうをく叡
感をて別ををとをつけて文嶽をあをへ給ふ方

士別天にのあり地に入をく上いへをきらくを物ぬ
下を黄泉のそこを為をくもしるふ屋をひをは
はをう国をを遥に発去て天海百里ばをうを
をのをふありひ七百里波海てをうをいを方に
をんをうのを三の海あり一は蓬を
中ふ天嶽をををを十二のを
に金字のをくをあり立をてを
院をを書をりをやをうをひををいハは中に
しをりとをををくを四ひて門を蓬をらをに
をを月四ををををんの童女ををてををくをり

雅と名乗る人そとふよ方士を試ばさうめてもい
漢家のこゝろのは彼が方士と申者ゆくはうや
きひのもが滝屋あらとあるくうの弟くはいこ着
申はまそうもんのとうみよやうきひさまる
ばふこのあらりは此世をゆて梅ばらむとそお
のとがそををしそく内へ入れ方士門のうさ
りこと立て今やおるとあまをまれこ宝海流へ
とこく洞天こ日られれけいこうさるりとらて
せうせんここく殺すこ白ふてそうもんのそう
みよおてゆ士を内へいりさるひへゆ士を門へ

こく金願のむのむこうこひさまはく射こみは
ゆめこめて松はとこのはけて抜き落ふ雲はひん
はこはくろりすこくらふたをうへこうてい
をこへてりふこは歌すこたのおそこひとせ
八人若金蓮をうりめりりやを若こそお
こうふ天雲へうくくこうくこうくひお雲こり
お落ふ雲はえんくくこくこく暁月は海をお引こ
こくこうは方士撥を抜こ入て君主てんくれ
は田ひは流語るこうくひはくくこく若ひく
結をみく見まるこり流こうこて表主は射こ一

行ていんこう御あるべきうへ
のうら豆電うふかりらの中日暮出しと
なん拍子ひて中こ出云をるけ書をよくよう
ぜんくくして源らんうん兵里ら里一枝
義面成却ひうう如しあ面さふあ士場り去るん
くをうよ及てきよくひひの出ひさ見成拍ひへ易
書うちうーふ書んぜんとゆ書をるよくひま
所うう玉のうんさーを書きれて方士ふふ方
士んさーを拍て先ちよの常世はあううの也
何をうれをりてちうしとするこうるんや彩い

玉把最立よ作りし時人のうりくちうしうる
あうはそをを取てちるーくせん拍ら寸ち長象
よちんちん色いうりりうりをひてりふちう
の龍ふあうる！を却そるこゆ書きをるくく
ひうう〇てのう面うく我七月七日出五和書
よ人をくちくよのりくりうよ作里し時獺牛藏
女のたくれ整り成ううやそて天ふのうで彩い
ひくくの書とるん地ふあら月彩いまんまれ
投さるらんとちひきを色い表立とまれくのう
志まり先ををてちーとすへくくく

五臺とのゝりの給へと高雲と陽うりうんぜん
天ふかくまく夕陽のうけのうらふせんくく
ちそちうしけりわ方土うんさーのまく云れうと
見とゝ紙うけく文願よ地未ちく具こ毛を鬱とう
ふ云京田ひふうへ初ひく伏ちませ給ひきう
がと年の反ひーうちうのお面ふてけぬて
りうちよるりよきり一会ち百生け移んひ墨う
こうくいりいんや知れ程世まそれはちちり
慢ゝちりしかしあふ見しーこひまれ天
上人間ちんちうちうちりう生を明へて電黒れ

よりひ紙ちるれ給りく羅ふうさは勢りるり
格天意ハちゝの世北亂兵安綱山揚出ふかを厳
をかりて切ようちり人紙ちゝ見ーあるり今周
東ハ軍ちうせいが陽懈ちう事ちこ星くけい
ちいいふ人ふお紙あり天おうりをふくこきハ
えいハせめのが易ーあるけ義道せいの運命
ちきのちうーちそ見くありきり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan